

《2008年12月例会報告》

【日 時】2008年12月20日（土）19：00～23：00頃？

【会 場】サッカー居酒屋「いなば」

〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町24-18 東松ビル2F（JR渋谷駅／南口から徒歩5分）

【参加者（会員）】阿部博一 伊藤洋次郎 牛木素吉郎 北原由 白井久明 鈴木崇正 田中俊也 田中理恵（途中から） 徳田仁 中塚義実 半澤隆憲 藤田幸雄 藤田稔人 松下徹 本杉亀一 横尾智治

【参加者（未会員）】庄司悟 染野忍 谷沙和子、他1名（女性）

【報告書作成者】中塚義実（一部転載）

お宝映像上映会兼サロン 2002 忘年会

12月例会は、お宝映像上映会を兼ねた忘年会でした。

メインは、1953年に行われた、イングランドvsハンガリー。フットボールの母国イングランドが、ホームではじめて大陸のチームに敗戦を喫した歴史的なゲームです。試合前のうんちくコーナーでは、S氏がとっておきのいい話を紹介してくれました（後述）。

お宝映像はこれだけではありません。1972年のヨーロッパ選手権決勝、イングランドvs西ドイツ。これもイングランドが“敵役”ですが、この時の西ドイツはベッケンバウアー、ネットザー、ミュラーら、サッカー史に残る名手がそろい、2年後に優勝したチームよりも評価の高かったチームです。すばらしいゲームです。このほか、2008年にブラジルで行われたフットサルワールドカップ決勝、ブラジルvsスペインもありました。盛りだくさんです。

けど、映像のありがたみはわかっている、酒と仲間がいたら盛り上がりますよね。

とても気持ちのいい夜でした。

【メインの映像】

1953年11月25日 於ウェンブリースタジアム（ロンドン）

イングランド 3 - 6 (2-4,1-2) ハンガリー

<ENGLAND>

1.Gil MERRIC (Birmingham)

2.Alf RAMSEY (Spurs) 3.Bill ECKERSLEY (Blackburn)

4.Billy WRIGHT(C) (Wolves) 5.Harry JOHNSTON (Blackpool) 6.Jimmy DICKINSON (Portsmouth)

7.Stan MATTHEWS (Blackpool) 8.Ernie TAYLOR (Blackpool) 9.Stan MORTENSEN (Blackpool)

10.Jackie SEWELL (Sheffield Wed.) 11.George ROBB (Spurs)

<HUNGARY>

1.Gyula GROSICS

2.Jeno BUZANSKY 3.Gyula LORANT 4.Milai LANTOS 5.Josef BOZSIK 6.Josef ZAKARIAS

7.Laslo BUDAI 8.Sandor KOSCIS 9.Nandor HIDEGUTI 10.Ferenc PUSKAS(C) 11.Zoltan CZIBOR

■上映前に紹介された「とっておきのいい話」＝「43年後のプレゼント」

少年たちは一プレーごとに歓声を上げ、無邪気に喜んだ。年配者たちはじっと押し黙り、かみしめるように、そして「あの時代」を思い出すように、画面に見入った。ふだんはサッカーなど見ようとしない女性たちも、この日ばかりはテレビの前に座っていた。

96年12月25日、静かなクリスマスの午後。ハンガリー国民は国営放送MTVにクギ付けになっていた。53年にハンガリーがロンドンでイングランドを6-3で破った試合が、この日初めてフルタイム放映されたのだ。

1953年11月25日水曜日。前年のヘルシンキ・オリンピック優勝のハンガリーがロンドンのウェンブリー・スタジアムでイングランドと対戦した。迎えるイングランドは、初めて出場した50年のワールドカップでアメリカに屈辱的な敗戦を喫したものの、いまだに「世界の帝王」だった。ウェンブリーでの国際試合での不敗記録は、もう30年間も続いていた。

だがハンガリーは立ち上がりから見事な攻撃を見せた。開始わずか1分でFWヒデクティが先制ゴール。イングランドも反撃し、15分に同点に追いつく。だがこの時点ですでにハンガリーとイングランドの力の差は歴然としていた。

ハンガリーはボールの魔術師の集まりだった。スピードとテクニックと強烈なシュート力を備えた選手が並び、しかもその選手たちが見事なチームプレーで結び付けられていたのだ。

前半のうちに4-2と差が開く。3点目は、左利きの天才FWプスカシュが右からのボールを右ポスト前で受け、目のくらむようなテクニックでイングランドのDFビリー・ライトを破り、左足でニアポスト側の天井にけり上げたものだった。

後半、15分までにハンガリーはさらに2点を追加し、その後の30分間は無理をせずテクニックの披露に費やした。ホームチームはPKで1点を返すのがやっと。スタンドを埋めた10万人のイングランド・ファンまでが、ハンガリーのプレーに感嘆し、最後には拍手を送った。

初めてウェンブリーでイングランドを倒したことだけではない。スコアだけでもない。流れるようなサッカーのすばらしさが、「マジック・マジヤール（ハンガリー民族）」と絶賛されたのだ。

だが翌年のワールドカップ（54年スイス大会）では決勝戦で不運な敗戦（4年ぶりの敗戦だった）を喫し、さらに、56年にはソ連軍の侵攻によって選手たちはばらばらとなった。ハンガリーがふたたび「マジック」と呼ばれるチームをもつことはなかった。

「20世紀最高の試合」と呼ばれた53年のイングランド戦は、ハンガリー国民にとって大きな誇りだった。だが、奇妙なことだが、国民の大多数は、この試合をフルタイムでみたことはなかったのだ。

当時、イングランドではテレビ放送が始まっていたが、ハンガリーはラジオだけの時代だった。試合の数日後に20分間ほどのダイジェストが全国の映画館で放映され熱狂を呼んだが、それだけだった。今回のフルタイム放送は、この試合のテープの権利をもつ英国のBBC放送と、イングランド・サッカー協会の好意で実現したものだった。

43年も前のひとつの親善試合。その試合は国民の間で「伝説」のように語り継がれた。それがキックオフから終了までカットなしの映像としてテレビで国民に伝えられたとき、「伝説」は「国宝」となった。

ハンガリー国民は、英国政府からのどんな経済的援助よりも、この粋な「クリスマス・プレゼント」に感謝したに違いない。

サッカージャーナリスト・大住良之

「東京新聞」1997年1月13日付「サッカーの話をしよう」より。
書籍『サッカーの話をしよう3』（NECクリエイティブ 1997）に再録。

■この映像を初めてみた者が興奮気味にサロン2002MLに投稿したコメント

2008.7.6.[salon2002 14] マジック・マジヤール（中塚）

いま、少なからぬ興奮とともにこのメールを打っています。

サロン総会の折、ある会員より「マジック・マジヤールの映像が手に入った！」との情報を得、その方に映像をダビング、郵送していただきました。ありがとうございます。なかなか時間が取れなかったけど、つい先ほど、軽く飲みながら、高1の息子とともに映像を見終わったところです。

このゲームは1953年11月25日にロンドンのウェンブレスタジアムで行われた、イングランドとハンガリーの国際親善試合です。フットボールの母国、イングランドは、この時点で欧州大陸のチームにホームで負けたことはありませんでした。しかし、1952年のヘルシンキオリンピックを制したハンガリーが、斬新で攻撃的なフットボールで6-3と制し、世界のサッカー史に“Magical Magyar”“ハンガリアンM”の大きな衝撃を与えたゲームとして、世界のサッカー史で5本の指に入るくらい印象深い、重要なゲームだったといえるでしょう。

私もこのゲームについては、活字や写真では知ってはいました。けど、ブダイーコチシューヒデクチープスカシューチボールの5人が繰り広げる“M”がどのように展開されるのか、動画でみたことはありませんでした。久しぶりに、本当の“わくわく感”を持ってサッカーの試合を見たような気がします。

「面白い！」が第一印象です。プスカシュの引き技からのゴールは、別の映像で見たことがありました。「あれはこれやったんや！」と感動しました。はじめてみるヒデクチは、クライフのような印象です。両ウィングのブダイ（右）、チボール（左）の職人芸、そして、ゴールライン際まで切れ込んで短く戻す「プルバック」については、かつてサッカーマガジン誌でエリック・バッティ氏が言及していた（ように思います）とおおり、多用されていました。

もちろん、守備に関しては非常に「拙い」と思います。特にセットプレーに対する守備は、高校生の地区大会レベルの危うさがあります（たぶんこの部分が、半世紀かけてサッカーが進歩してきたところなのでしょう）。けど、一つひとつのパスには意図があり、パーフェクトスキルに裏打ちされた美しいゲームは、当時の人を間違いなく驚かせたのだらうし、いま見ても、美しいと思いました。

ついでながら、イングランドの7番はスタンレーマシューズ、2番はアルフ・ラムゼーです。前者は、あの有名な「マシューズ・フェイント」の使い手です。前半は中途半端なポジションで目立ちませんでしたが、後半、得意の右サイドから、あのフェイントで何度か突破していました。相手も、わかっているのだらうけどなぜかやられてしまう。“職人芸”とはこういうのを言うのでしょうか。アルフ・ラムゼーは、1966年のワールドカップ優勝監督です。そう言えば、イングランドも、思ったほどロングボールの放り込みをしないというのが印象的でした。「イングランド・サッカーは、ロングボールの放り込み」というのは、もしかすると1966年のイングランド大会以降の印象なのかもしれません。

ちょっと興奮気味で、ずらずらと感想を述べました。ちなみに高校1年生（筑波大学附属高校サッカー一部員）の息子も、かなり喜んで見入っていました。あいつも相当なサッカーフリークで、「プスカシュ」「コチシュ」「ヒデクチ」、あるいは「マシューズ」の名前はすでに知っており、相当入れ込んで見入っていました。けど、この映像で盛り上がることのできる高校生は少ないのだらうなあと、彼も分析していました。

以上、勝手に興奮している話でした。（中塚義実）